あおいとり 弐式

カラスがあんまりぐちぐち言うものだから、おしゃべり仲間のスズメもすっかり参ってしまいました。とはいえスズメのちっぽけな（おまけにとびきり軽いのです）脳では、カラスの悩みを理解するのでせいいっぱい。とても助言なぞできたものではありません。そんなわけで、多少はりこうなツバメに尋ねてみました。

「これこれこういうわけなんだけど、なにか良いあてはないものかしら」

カラスは嫌われ者だからツバメだってカラスのことは好きじゃあないけれど、スズメがたずねてくカラスの真っ黒な羽のわけについては、どこかの誰かの寓話がまったく正しく説明しています。よくばりカラスはたっぷりの色の魅力に目がくらんでしまって、ぜんぶを身につけなくては気が済まなかったのです。あわれカラスの羽はまっくろに。それはそれで美しいけれど、やっぱりカラスは納得がいかない。ほんとうは、だれよりもきれいなトリになるはずだったのに。

「このみじめな色をどうにかできたらなあ」

るのなら悪い気はしません。だからこう答えてやりました。

「汚れは落とすものよ。カラスの小汚い色を落とすには、うんときれいな色に、欲張ったそれぞれの色を返してあげればいいの」

それを聞いたカラスはおおよろこび。うっそうと茂る、背の高い木のすきとおる葉っぱに緑色。地面に落ちてぱっくりと割れたザクロの、宝石みたいな果肉に赤色。ビルとビルの間に差し込む、じんわりとした夕焼けに黄色。藍色。紫。橙。カラスを染めた、虹の7色から作った特製の染料を、カラスは一つずつていねいに返していきます。青色を残してほかの6色を返し終わった段で、中途半端な水色が気に入らなかったので、もともと自分で持っていた白色も、洗い立てのシーツに返してしまいました。いまやカラスは、目も覚めるような美しい青色のトリです。

「カラスさん、あんたすっかりきれいになったねえ」

スズメは目を細めますし、カラスもまんざらではなさそう。でも、まだちょっぴり不満そうです。

「まだまだおれはきれいになれるよ。だって色ひとつ返すたび、ぐんぐんきれいになってったんだもの。まだもう一色残ってる、こいつを返せばおれは、きっとだれよりもきれいなトリになれるはずさ」

カラスはすでに、とびっきりの青色を見つけていました。それはいつだってカラスたちの頭の上にあったのです。うんと澄み渡った晴れの日のまっぴるま。それはカラスが誰よりうつくしいトリになる、ぜっこうの時間帯に思われました。もう沈んだり昇りかけたりの太陽の薄暗い闇に、かあかあとなきわめく必要はないのです。スズメもちっぽけな頭をゆすって、「それはいいねえ！」とわらいました。

さて、運命の昼がやってきました。空はこの上ない快晴で、まるでいまのカラスの羽みたいにまっさおでした。カラスはいちどスズメをすこしだけ見下した目でちろりと見てから（なにせみすぼらしい茶色と白です）威風堂々と雲一つない空に向かって飛び立ちました。抜けるように青い空に、カラスの羽が映ります。

「ああ、いまこそこの青色をお返しします！」

カラスがそう叫んだとたん、晴れだというのに空が雷でぴかっと光りました。おもわず目をつむったあとにスズメが見たのは、ただただ青いばかりの空でした。すべての色を返してしまったカラスは、とうめいになって、どこかに消えてしまったのです。ぽかーんとするスズメの隣に、舞い降りたツバメが言いました。

「いったでしょ、汚れは落とすものだって」

これでこの町も、ごみをカラスに荒らされることなくきれいになるでしょう。すまし顔で言ってのけるツバメでしたが、あんまりにも魂の抜けたふうのスズメが気の毒だったので、こう言ってやりました。

「カラスは空になったのよ。美しい空にすっかり溶けてしまえた。まっくろから初めて、ずいぶんな出世じゃない」

見上げた空はたしかにあまりに美しかったので、スズメはとたんに元気になって無邪気に笑いました。あのどこか、いえ全体にカラスがいるのです。そう思うと悲しい気持ちはすっかりしぼんでしまいました。からっぽの頭をゆすり、よかったねカラスさん、そういって空に笑いかけます。どこまでも

美しい青空に、ツバメの黒とスズメの茶色が、ぽつんぽつんと浮かびました。